溜池通信vol.248　　*Weekly Newsletter*　*October 1, 2004*

双日総合研究所
吉崎達彦

Contents

****

特集：シミュレーション小説、ケリー政権誕生　1p
＜今週の”The Economist”誌から＞
”Hu done it”　「胡錦涛の勝利」　6p
＜From the Editor＞　「ブッシュ再選の場合は…」　7p

****

特集：シミュレーション小説、ケリー政権誕生

今週お届けするのは、「時事トップコンフィデンシャル」9月24日号に掲載されたシミュレーション小説です。実際の大統領選挙は、9月中にブッシュのリードが拡大しつつありますが、ここでは「ケリー政権誕生」を仮定していろんな補助線を引いてみました。

間もなく第1回のテレビ討論会が始まるところ。投票日までは残すところ1ヶ月ですが、そろそろ「どっちが勝つか」よりも、「11月以後」を見通す必要がでてきたと思います。

●11月2日～政権交代へ

午後9時、ホワイトハウスの大統領執務室。集まった男たちの表情は暗かった。刻一刻と伝えられる開票速報では、レッド・ステーツ（ブッシュ支持州）、ブルー・ステーツ（ケリー支持州）の大勢は予想通り。問題はパープル･ステーツと呼ばれる激戦州で、遺恨のフロリダ州はブッシュが優勢、もうひとつの焦点であるペンシルバニア州はケリーが優勢。そうなると残る大票田はオハイオ州。テレビの報道は、ケリー優勢を伝えていた。

「あのファルージャ事件さえなければ…」その場の一人の口から、思わず愚痴が漏れた。シーア派地域のナジャフにおいて、アラウィ新政権とサドル師の対決が注目を集めている間に、スンニ派地域のファルージャはテロリストの聖域となっていた。10月下旬、ここで反米勢力が一斉蜂起し、米軍の一部隊を全滅させた。「ファルージャ･ショック」は大統領選の情勢を一変させた。犠牲になったのは、オハイオ州出身の連隊だったのだ。

「大統領！」トレードマークの赤い表紙のバインダーノートを手に、部屋に入ってきたのは選挙戦を仕切っているカール･ローブ上級顧問である。彼のノートには、これから先のあ

らゆる予定と指示が、事細かに書かれているというもっぱらの評判だ。
「ペンシルバニア州で、民主党による不正行為が行われていた形跡があります。即座に選挙無効を申し立てしましょう」
ブッシュ大統領は、軽く手を上げて制止した。そして卓上の電話を手にとった。
「もしもし…ジョージです」
部屋の中は静まり返った。この状況で大統領がアドバイスを求める相手は、ただ一人しか考えられない。受話器の中の声が聞こえた。
「何も言うな。今のお前の気持ちは誰よりも私がよく分かっている」
「父さん…」
受話器を手にした第43代大統領の肩ががっくりと落ちた。
ボスの戦意喪失を見て取ったローブは、静かに大統領執務室を去った。彼の仕事はもう終わったのだ。自分のデスクに戻るや否や、彼は叩きつけるように、バインダーをごみ箱に放り込んだ。

●新政権発足〜動揺する世界

その夜、日付が変わる少し前に、ブッシュは敗北を宣言した。それを受けてケリー上院議員は、「寛容の精神をもって、米国の再統合を目指す」とのコメントを発表した。翌日、両者はホワイトハウスの庭で固い握手を交わす。合衆国第44代大統領は、幸いなことに大きなトラブルなしに確定した。
当選後、ケリーが最初にかけた国際電話の相手はフランスのシラク大統領だった。ここぞとばかりフランス語で饒舌に祝意を示すシラクに対し、ケリー次期大統領はイラクの治安維持への協力を求めた。が、返事は思わしくなかった。
「セネター・ケリー。フランスがイラクに派兵しないのは、わが国の国益を考えて決めたことだ。ブッシュが憎いからではない」
答えながらシラクは苦いものを噛み締めていた。欧州の国々は、拡大したＥＵの内部を抑えるので精一杯であり、域外に関与する余裕はない。また、今やフランス国内の1割近くを占めるイスラム人口を考えても、中東で迂闊な行動は取れない。米国の申し出に「ノー」と答えるだけで、影響力を示すことができたブッシュ時代は良かったな――シラクは秘かに自嘲した。
電話会談は次々と行われた。英国のブレア首相は、半年以内に行われる総選挙を控え、何を呼びかけても気もそぞろといった感じ。ドイツのシュローダー首相も、支持率低下でレイムダック状態。ロシアのプーチン大統領は、チェチェン問題の悪化で手一杯であり、米国を助けるどころではない。
「何が国際協調だ」ケリーは憤然としながら電話機を置いた。
傍らには安全保障担当補佐官に任命したサンディ・バーガーが控えている。

「次は日本の小泉首相の番ですが」バーガー補佐官が言った。

「中国を先にしてはいかんのか？」ケリーが尋ねる。

「日本は中東への重要な戦略拠点ですし、朝鮮半島情勢のこともあります。なるべく早くコンタクトすべきです」。クリントン時代にも同じ仕事をしているだけに、バーガーは手馴れている。その一方、過去を知り過ぎているだけに、動きが鈍くなることもあった。

「それに中国と電話会談をする場合は、胡錦濤の前に江沢民にも連絡を入れる必要があるかと思いまして……」

ケリー新政権に対し、その日のうちに世界からさまざまな祝意が寄せられた。もっとも手荒なのは、アルジャジーラ放送が伝えたアルカイダの声明文であったろう。

「中東に軍隊を送ろうとした指導者は、親子2代にわたって神の懲罰を得た。米国新政権は、このことを貴重な教訓とすべきである。神は偉大なり」

●12月の波乱～アジア政策にご用心

新政権の発足は2005年1月20日であり、それまではブッシュ政権が続くことになる。ただし政権移行期だけに、新しいことを始めることはできない。幹部たちは次の仕事を探すために気もそぞろであるし、新たな政権の陣容は固まっていない。一種の政治的空白ができてしまうのだ。

この時期に新たな対米テロが生じては一大事。このため、ブッシュ旧政権とケリー新政権の間では、テロ対策とイラク情勢に関する協議機関が設置された。

が、事件は予期せぬ場所で生じる。舞台は台湾だった。12月に行われた立法院選挙は、3月の総統選挙を思わせるような激戦となった。開票結果は与野党の議席数がほぼ同数となり、不正選挙を叫ぶ双方の支持者たちが全土で衝突を繰り返した。そして混乱による政治停止が3日を過ぎた時点で、北京政府は事態収拾のために人民解放軍の出動を示唆したのである。

ケリーは至急、スタッフを招集して意見を求めた。議論は百出した。

「北京の危険な行動を認めるわけにはいきません。すぐに台湾防衛にコミットすべきです。至急、中台海峡に空母部隊の派遣を」

「1996年当時ならともかく、今は中国とは対テロリズムで協力関係にあるし、朝鮮半島問題でも協力を得る必要があります。ここは静観すべきでしょう」

そもそもケリー政権には、確たるアジア政策がない。民主党の政策綱領全37ページ中、アジアについて触れたのはわずかに7行だけ。朝鮮半島情勢については、元国防長官のウィリアム・ペリーに尋ねれば済むが、中台海峡問題についてはしかるべきスタッフがいない。

考えあぐねているところに、重要なヒントをくれたのは、意外にもケリーの盟友、テッド・ケネディ上院議員だった。

「今の君にとって、何よりも重要なのは議会の状況だ。上院も下院も、多数は共和党に握られてしまっている。ここはひとまず、親台派の機嫌を取って、議会共和党に恩を売ってお

くべきではないかね」

共和党の政策綱領は、全94ページ中対アジア政策に丸々4ページ弱を割き、「台湾は米国の長きにわたる友人であり、純粋な民主主義国である」と高く評している。たとえ米中関係が危うくなるとしても、ここで台湾を見捨てることはできない相談である。

「ケリー新政権は中台海峡問題について、ブッシュ政権の政策を継承する」――この声明を出すと同時に、北京はトーンダウンし、台湾の選挙騒動も嘘のように静まった。

「米国は否応なく、中台間のゲームに巻き込まれてしまう」それは大統領就任前にケリーが得た苦い教訓であった。

●議会との対立～低い政策的自由度

ケリー新政権にとって、最大の悩みは議会情勢だった。大統領選挙と同日に行われた議会選挙の結果、上院は51対49と現状維持だったが、下院は実に233対202議席と、共和党が5議席を上積みした。

種明かしは簡単だ。上院は１つの州から1人が当選するので単純だが、下院は州ごとに複数の選挙区がある。人口移動による区割り修正の際に、現職が優位になるような線引きが行われる。いわゆるゲリマンダーというやつだ。共和党は1994年に下院のマジョリティを得て以来、優位を維持しており、2002年には、中間選挙で与党が勝つというめずらしい快挙を成し遂げた。2004年の議会選挙も、文字通り「負ける気がしない」選挙であった。

米国では、税制や財政は100％議会のコントロール下にある。新大統領が財政再建を望んだとしても、議会が増税に反対すれば物事は進まない。上院議員として長いキャリアを持つケリーが驚くほど、ホワイトハウスには政策の自由度がないのであった。

敵は共和党だけではなかった。大統領選では「打倒ブッシュ」のために結束していた民主党は、目標を達成した後は分裂気味になっていた。予備選挙でハワード・ディーンを支持していた党内左派グループは、米軍のイラクから即時撤退を求め始めた。さらに労組やマイノリティのグループなど、民主党のさまざまな支持母体が論功行賞を求め、個々に要求を突きつけてきた。

なかでも頭が痛いのはイラクへの対応である。ケリーは政権公約として、イラクへの増派と装備の充実を求めていたが、「ファルージャ･ショック」後の世論にそれを求めることは困難に思われた。かといって、完全撤退となれば、その後の中東情勢がどうなるか分からない。さらに、ここで意見を変えたとあっては、またしても「フリップ･フロップ」（態度をコロコロ変える）のそしりを免れない。

共和党は当初、米国政治の伝統にのっとって「最初の100日間」は民主党政権の船出を暖かく見守る予定だった。しかし、1月6日に新議会が発足し、ビル･フリスト上院議員があらためて多数派院内総務の座につくと雲行きが変わる。共和党内部で、早くも2008年の大統領候補をめぐるレースが始まったのだ。ブッシュが去った後の共和党において、フリストは自

他ともに認める有力候補である。2008年のためには、ケリー政権への対決姿勢を示さなければならない。

共和党指導部において、「新閣僚の承認には、十分な時間をかける」方針が確認された。すなわち、ケリー新政権の発足をできるだけ遅らせようというのである。

●就任演説～鍵は経済政策へ

1月20日の就任式を前に、ケリーは就任演説の草稿を練っていた。が、いい知恵は浮かばない。外交で新機軸を打ち出すことはできず、社会政策にも手をつけられない。となれば、あとは経済政策を目玉にするしかない。

ケリーは経済スタッフを招集し、意見を求めることにした。

「私は失業問題を解消することを公約して当選した。とくにオハイオ州での勝利が大きかった。オハイオ州のブルーカラー層に訴えかけるようなメッセージを打ち出したい」

最初に口火を切ったのは、経済担当補佐官に就任したジーン・スパーリングである。

「やはり製造業の復活に焦点を当てるべきでしょう。ブッシュ政権はモノ作りをないがしろにし、貿易赤字を増やして雇用を失った。われわれはその逆をやるのだと」

「だが、うまく行くだろうか」財務長官に就任予定のロジャー・アルトマンが応えた。「2004年の米国経済は4%の高成長だったが、設備稼働率は75%程度だった。つまりモノ作りはコストの安い海外で、というのが米国経済の常識になってしまっている」

スパーリングが続ける。

「企業の海外移転を止めさせることが先決です。それから産業政策で製造業を振興する。貿易黒字国に対して市場開放を求めることも忘れてはなりません」

「米国にとって、今の最大の赤字対象国は中国だが、彼らを刺激したくはないな。そうなるとやはりターゲットは日本か」と、ケリーがつぶやいた。

「馬鹿らしい。君らの議論は聞いちゃいられない」ついに黙っていられなくなったのは大統領経済諮問委員会（ＣＥＡ）の委員長候補であるポール・クルーグマン教授だった。

「企業の海外移転がいけないって？オハイオ州で第二位の雇用主はホンダだぜ。ホンダが米国で工場を作るのは良くて、GMが中国に行くのは駄目なのか？　産業政策や通商政策で失業を解決するなんて、いつの時代の経済学を語っているんだよ。日本叩きだって、クリントン時代に君たちが散々やったことだろう。日米自動車協議がその後どういう結果になったか、誰か教えてくれよ」

辛らつな経済学者は言いたい放題言うと、そのままプイと席を立ってしまった。残された面々に、救いようのない沈黙が訪れた。ややあって、一人のスタッフが口を開いた。

「大統領、産業政策と通商政策が駄目でも、まだ方策があります。就任演説では言えない話ですが、為替政策、つまりドル安誘導という手が……」

＜今週の”The Economist”誌から＞

"Hu done it”　　Cover Story

「胡錦涛の勝利」　　September 25th 2004　P.13

＊あっと驚く江沢民の引退。中国共産党の内部はどうなっているのか。”The Economist”誌が辛らつなことを言ってくれそうです。

＜要旨＞

ビスマルクいわく、政治とソーセージは製法を聞かない方がいい。とすれば、中国共産党もソーセージの類か。9月19日、国家主席にして共産党総書記の胡錦涛は、軍事委員会主席という第3の地位を手に入れた。前任者の江沢民は2002年にこの地位だけは明け渡さず、以後、内紛の噂は絶えなかった。今や江沢民時代は終わり、胡錦涛が単独トップにたった。

鄧小平の場合は、引退してからも何年か最高指導者であり続け、そのことは天安門事件まで分からなかった。江沢民は鄧小平ではないが、政治局員9人中5人は彼の指名であり、影響力は残るかもしれない。いずれにせよ毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦涛と人物は小粒になっており、中国は個人崇拝から集団指導体制へと変わっている。が、真の問題は誰にも先の見通しがつかないことだ。中国が世界から孤立していれば、こんな不透明さも問題ない。しかしそれは時代錯誤というもの。中国は今や国際社会の一員であり、影響力を有している。

確かなこともある。経済改革は本物だし、海外への経済開放も進んでおり、景気過熱抑止のための貸し出し抑制も理解されている。江沢民の偉大な功績は、憲法に資本主義を持ち込んだことだと歴史家は記すだろう。もし方向転換があるとすれば、繁栄の犠牲者に注目することであり、胡錦濤と温家宝は資本主義をより受け入れやすいものにと強調している。

外交も従来路線を継続しよう。江沢民の功績は、世界における米国の卓越を受け入れ、ロシアと組んで対抗するような愚を避けたことだ。そして米国や近隣国への関与に努めた。米国が対テロ戦争で行き過ぎても中国は平静を保ち、3度にわたって6ヶ国協議を主催した。アジアの経済や安全保障機構に熱心に参加し、ＷＴＯの加盟国となり、ＰＫＯにも参加した。今日の中国は「現状維持勢力」と呼ばれるほどであり、突然の政策変更の可能性は低い。

それでも疑問符がつくのは台湾に対する態度である。12月に行われる立法院選挙では、陳水扁総統に議会の多数を与えるかもしれない。その場合、台湾はゆっくりと独立に向かうだろう。そのとき中国は？　胡錦濤は江沢民よりは慎重だといわれるが、何を考えているかは不明である。台湾におけるいかなる紛争も、中国の他の関係すべてを混乱させ得る。

証拠は薄弱ながら、胡錦濤は中国のゴルバチョフではないかと何度も見られてきた。彼は党員として限定的な民主化を検討してきた。過去2年間は改革者としては失望を招いた。中国は香港の民主化の希望を砕いたし、インターネットの議論を制圧し、投票の導入に消極的だった。ＳＡＲＳの扱いに失敗したことを認める程度にはオープンになった。過去の記録はお粗末だが、江沢民の抑圧がどの程度あったのか。いずれにせよ彼の出番はこれからだ。

＜From the Editor＞ ブッシュ再選の場合

ケリー政権誕生の場合は本編で書いた通りですが、同様なシミュレーションをブッシュ再選で行ったらどうなるか。以下はとりあえずアイデアのみを列挙しておきます。

○国際社会の反応：「2008年までブッシュ政権が続く」ことが確定するので、それまで「反米」「反ブッシュ」運動を行ってきた勢力には、一気に徒労感が出る。北朝鮮では金正日が部下を相手に怒鳴り散らす。パキスタンの洞窟に潜むウサマ・ビンラディンは、「もはや部下も資金も尽きた」とほぞを噛む。フランスのシラク大統領は、「やれやれ、でも野党暮らしも悪くはない」とつぶやく。

○イラク情勢の急変：投票日を過ぎて「もう世論に遠慮しなくても良くなった」米軍が、ファルージャなどの危険地区で一気に掃討作戦を開始する。（ただし勝利の票差が少なかった場合は、ブッシュ陣営は12月の第3水曜日に行われる「選挙人の投票日」において造反票が出ることを警戒し、「あと1ヵ月半我慢する」ケースもあり）

○金融市場の変化：ＦＦレートの利上げにもかかわらず、このところ低下傾向にあった長期金利が、ブッシュ再選後に急騰する。市場は「2008年までブッシュ政権が続く」ことで、急に財政赤字問題に注目し始めたのだ。ウォール街は株安の進行に慌てるが、ブッシュ自身は何が問題なのかを理解していない。

○難航する2期目の閣僚人事：パウエル国務長官、ラムズフェルド国防長官がそれぞれ後任候補者リストと、分厚い引継ぎ書を持ってホワイトハウスを訪れる。両者は偶然に大統領執務室の前で鉢合わせする。「あなたからお先に」「いえ、あなたこそ」と譲り合うが、一瞬の沈黙の後、両者は「では、ご一緒に」と笑顔でドアを開ける。

○動き出す2008年選挙：11月18日、アーカンソー州にオープンしたクリントン大統領記念館に、めずらしくもゴアがお祝いに駆けつける。クリントンがゴアを相手に語りかける。

クリントン「われわれがなぜ負けたか、分かるかね？」
ゴア「われわれはブッシュを憎みすぎた。しかし人間というものは、憎しみという感情を長く持ち続けることは出来ない」
クリントン「そう、民主党はとにかく目の前の2004年選挙に勝とうとした。しかし本当は、2010年や2020年に勝つことを考えるべきだったのだ。守るべき価値観をしっかり定義して、新たな支持母体を育てていかないと、アメリカの保守化は進む一方だ」
ゴア「でも君は、2008年はヒラリーに賭けるのだろう？」
クリントン「なあに、こだわっちゃいないよ。エドワーズだっていいし、君だってその気がないわけじゃないんだろう？」

こんな風に書き出すと切りがないので、この辺でやめておきます。実際の11月以後は、どんなドラマが待ち受けているのでしょうか？

編集者敬白

―――

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-15-27 http://www.sojitz-soken.com/ri/
双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954
E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com